

末摘花の役割と蓬生巻の意義

片山理恵
久留須倫子

はじめに

末摘花が登場する巻は五巻ある。時系列順に、末摘花巻、蓬生巻、玉鬘巻、初音巻、行幸巻であるが、周知のとおり、早く末摘花巻において、あたかも醜女の代表であるかのごとく、悪し様に記されている。

居丈の高く、を背長に見え給ふに、さればよと胸つぶれぬ。うちつぎて、あなかたわと見ゆるものは鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先の方少し垂りて色づきたる事、ことのほかにうたてあり。色は雪はづかしく白うてさおに、額つきこよなうはれたるに、なを下がちなる面やうは、大方おどろおどろしう長きなるべし。

(末摘花巻・二二四頁) (註)

傍線を付したが、容姿に関わってことごとく評価が低く、つまり、外面の悪さを強調されていることが明らかである。また、それだけでなく、

例のしつまでも心むと、とかう聞こえ給ふに、いたうはちらひて、口おほひしたまへるさへひなび古めかしう、ことごとしく儀式官の練り出でたる肘もちおぼえて、さすがにうち笑み給へるけしき、はしたなうすろびたり。

(末摘花巻・二二五頁)

とあり、外面のみならず、二重傍線部「古風」であること、波線部「気の利かない」ことなど、性格や知性などについても低評価で、いわば、内面の悪さも言われている。

このような傾向は、玉鬘巻、初音巻、行幸巻でも一貫しており、例えば玉鬘巻では、「かやうにわりなう古めかしう、かたはらいたき所のつき給へるさかしらに、(源氏は)もてわづらひぬべうおぼす」(二七〇頁)とあり、末摘花の返歌作法に「もてわづらひ」、苦慮する源氏の様子が描かれている。

ところが、一転、蓬生巻では、「ひたふるにもつづみしたるけはひのさすがにあて、やかなる」(一五一頁、一五二頁)と、あたかも別人のごとく高い評価に転じている。

この事実について、末摘花に評価を下す人物が全て同じ源氏であるにも関わらず、評言が対照的であるという矛盾が、古来、問題になっており、例えば、森一郎氏は、「動揺せず、源氏を待ちに待った末摘花を、一貫して立派な姫君としてえがいた作者の筆が、再会というクライマックスの場面で、やや度を超えて末摘花をよくえがきすぎたのだ。唐突に付着的造型を加えたのである。作者の書こうとする構想、主題に作中人物がひきつけられすぎ、あまりにも主題に奉仕せしめられ、人物としての統一性をさえこわしてしまっているのである。」(注²)と述べられ、人物像の変貌を指摘されている。一方で、例えば、山本利達氏は、「蓬生巻で末摘花が貧窮の極にあつて、なお父宮の屋敷や

その形見の調度を手放さないという強い態度をとるのは、末摘花でうかがうことのできる父宮の末摘花に与えた指導に根ざすものであり、それを一心に守って生きてきた心のあらわれということができるであろう。(中略)本質的には末摘花の変貌でなかつたといえよう。」(注³)とされ、末摘花は「変貌」しておらず、矛盾もないと述べられ、「変貌」なのか「変貌でない」のか、見解は分かれている状態である。しかし、「変貌」説については、「変貌」したはずの末摘花の評価が、蓬生巻より後の巻では再び低評価に戻る点が、また「変貌でない」説については、同じ源氏の評価が急に対極のものになる点が、いずれも合理的に説明できず、不審はぬぐえない。いったいなぜ蓬生巻のみ違うのだろうか。

本稿においては、源氏が、末摘花を他の女君と比べている場面を起点に、末摘花という人物の役割について明らかにし、さらに、そこからうかがえる蓬生巻の特徴について考察する。

一、末摘花巻での末摘花

一・一、空蟬との比較

「はじめに」で述べたとおり、末摘花は末摘花巻におい

て外面、内面とも悪い人物として描かれている。末摘花巻で末摘花と一夜過ごした源氏は空蟬と比較して次のように述べている。なお、引用した本文のあとの現代語訳は私に付している。

かの空蟬の、うちとけたりしよひの側目には、いとわろかりしかたちざまなれど、もてなしに隠されてくちおしうあらざりきかし、劣るべきほどの人なりやは、げに品にもよらぬわざなりけり、心ばせのなだらかにねたげなりしを、負けてやみにしかな、ともののおりごとにはおほし出づ。 (末摘花巻・二二八頁)

〔あの空蟬は、くつろいだ姿の宵の横顔は、容貌の大変良くないものではあったが、その振る舞いに隠されて残念と言うほどでもなかったが、〔末摘花は空蟬に〕劣るような身分の人であろうか。なるほど、女性は身分によらないものであるな。氣立てがおだやかで、姪ましいほど立派であるので、こちらの負けで終わってしまったのであるよ。〕と何かの折ごとには思い出しなさる。〕

傍線部のとおり、ここでは、宮家の娘である末摘花より、身分の低い空蟬の方が身だしなみや氣立ての良さで高

い評価を得ている。つまり、末摘花が空蟬と比べられ、源氏に改めて低く言われることよって、空蟬が氣立ての良さなどにおいて相対的に評価を上げているのだと言える。

また、初音巻では、空蟬と末摘花は共に二条東院で源氏の庇護を受けながら暮らしているのだが、二条東院を訪れた源氏は、

はかなき事をのたまひかくべくもあらず、大方のむかし今の物語りをし給て、かばかりの言ふかひだにあれかしと、あなたを見やり給ふ。 (初音巻・三八九頁)

〔空蟬は〕つまらないことを話しかけなさるはずもなく、世間一般の、昔や今の話をしなさって、これくらいの話がいあれば良いのにと、あちら〔末摘花〕の方に目をお向けになる。〕

と、傍線部のとおり、末摘花と比較の上で、空蟬の「言ふかひ」あるふるまいぶり、いわば、源氏に対する行き届いた心遣いの素晴らしさを痛感している。ここでも末摘花を比較対象として空蟬にあてがうことよって、相対的に空蟬の素晴らしさが際立つ仕組みになっているといえるだろう。

一・二、若紫との比較

空蟬と同様に、末摘花巻において源氏が末摘花と比較するものが若紫である。末摘花巻で、「かの紫のゆかり尋ねとり給ひて」(二二二頁)と、源氏が若紫を二条院に引き取ったことが描かれており、若紫巻と末摘花巻の二巻が時系列上並行し、また、この両者が同時期に源氏と関わる女君として設定されていることがわかる。注目したいのが、源氏と若紫が絵を描いて戯れる場面である。

(末摘花のもとから)二条の院におはしたれば、紫の君、いともうつくしき片生ひにて、紅はかうなつかしきもありけりと見ゆるに、無紋の桜の細長なよらかに着なして、何心もなくものし給ふさま、いみじうらうたし。

(末摘花巻・二三三頁)

(末摘花のもとから)二条院においてになると、紫の君(若紫)が大変かわいらしく幼い姿で、紅色でもこんなにも慕わしいものもあつたのだなと思われるにつけても、無地の桜重ねの細長をしなやかに着て、あどけなくしていらつしやるのが、大変かわいらしい。

若紫のほおの赤さをみた源氏は、直ちに末摘花の鼻の赤さを連想し、それと比べて若紫を「かうなつかしき」と考

えている。「はじめに」でも引用したが、末摘花の鼻については「先の方少し垂りて色づきたる」とあつて、その「色」が、若紫のほおと似た「紅」であることによつて、必然的に若紫の可愛らしさが引き立つことになる。この場面について、室伏信助氏は、「容貌をはじめ、衣装を含めた風情、絵などの才覚までが人間の魅力としての優劣さを強調する描き方は、年時的に『若紫』巻に重ねた意図とともに、ヒロインの比較を巻末に置いてその効果を高めた作為性を、やはりつよく認めざるを得ないだろう。」(注4)と指摘しておられるが、従うべきである。

以上のことから、末摘花は若紫と比べられ、そのマイナスを指摘されることで、若紫の、とりわけ、容姿の素晴らしさを引き立てる役割を果たしているといえるだろう。源氏によつて時に空蟬、時に若紫と比較され、空蟬の氣立での良さ、若紫の容貌の良さについて際立たせ、源氏の空蟬や若紫に対する評価を高めるようはたしていることがわかる。つまり、末摘花巻において末摘花は他の女君と比べられ低められることで、その女君の評価を相対的に上げる役割を果たしていると言えるだろう。

二、玉鬘巻、初音巻、行幸巻での末摘花—玉鬘との比較—

末摘花は、玉鬘十帖のうち、玉鬘巻、初音巻、行幸巻の三巻に登場している。ここでも末摘花巻と同様に、その素行について源氏から呆れられる姿が描かれている。また、これらの巻中では、中心人物となる玉鬘と比較されてもいる。顕著な例として、玉鬘巻における源氏と玉鬘の文のやりとりについて引用しておく。

唐の紙のいとかうばしきを取り出でて書かせたてまつる。

数ならぬ三稜やなにの筋なればうきにしもかく根をとゞめけむ

とのみほのかなり。手は、はかなだち、よろほはしけれど、あてはかにてくちおしからねば、御心おちるにけり。
(玉鬘巻・三二六〇頁)

(唐紙の大変美しいものを取り出して文をお書きになつて差し上げる。

ものの数ではないこの身は、どのような因縁で、三稜草が沼に根を下ろすようにこの浮世に生まれてきたのでしょうか。

とだけ墨付きもかすかに書いてある。筆跡は頼りな

く、たどたどしいが、上品で見苦しさがないので、源氏はご安心なされた。)

源氏は玉鬘に文を送り、その返信の「あてはかにくちおしから」ぬ風情に安心し、六条院への引取りを決意するにいたる。そもそも、源氏が玉鬘に文を送ったのは、次のような理由であった。

「あはれにはかなかりける契となむ年ごろ思わたる。(中略)言ふかひなくて、(中略)思ひ忘る、時なきに、さてものし給はば、いとこそ本意かなう心ちすべけれ」とて、御消息たてまつれ給。かの末摘花の言ふかひなかりしをおぼし出づれば、さやうに沈みて生ひ出でたらむ人のありさまうしろめたくて、まづ文のけしきゆかしくおぼさるゝなりけり。

(玉鬘巻・三五九頁)

(しみじみといとしく、儂い縁だったと長年思い続けてきたものだ。(中略)夕顔だけは亡くなってしまつて、(中略)忘れる時もなかったの、こちらにいらつしやるのであれば、本当に長年の志がかなう気がするよ。」と、お手紙を差し上げなされる。あの末摘花が話にならない人だったことを思い出し出したの

で、そのようにして落ちぶれて育ってきた人の有様も気がかりなので、まず手紙の様子がどのようなものか見たいとお思いになつたのであつた。)

傍線部のとおり、源氏はかつての末摘花を想起し、いったん零落した女君の成育ぶりが不安であつたため、玉鬘の引き取りに当たつて、その知性の水準を確認しておきたかつたわけである。ここで、「言ふかひなかりし」と想起される末摘花の文については、末摘花巻に次のような記述がある。

おはしますまじき御けしきを人く胸つぶれて思へど、「なを聞こえさせ給へ」とそ、のかしあへれど、いとゞ思ひ乱れ給へるほどにて、えかたのやうにも続けたまはねば、夜ふけぬとて、侍従ぞ例の教へきこゆる。

晴れぬ夜の月まつ里を思ひやれおなじ心にながめ
せずつも

口ぐに責められて、紫の紙の年経にければ、灰をくれ古めいたるに、手はさすがに文字強う、中さだの筋にて、上下ひとしく書い給へり。見るかひなううちをき給ふ。

(末摘花巻・二一九〜二二〇頁)

(源氏が)お越しになりそうにもないご様子に女房達は胸のつぶれる思いであるが、「やはりご返事申し上げなさいませ」と皆でお勧めしたけれど、末摘花はいよいよ思い悩みなさっている様子で、形式通りの言葉でさえお続けになれないので、夜が更けてしまつたと、侍従がいつものように教え申し上げる。

晴れぬ夜の月を待つ里のように、訪れないあなたを待っている私の心を思いやり下さい。たとえ、私と同じお気持ちで物思いにふけらなくて

も。
女房たちから口々に責められて、紫の紙で、年数を経て白茶けて古ぼけているものに、筆跡はさすがにしっかりとした筆遣いで、中昔の流儀で天地をそろえてお書きになっている。光源氏は見るかひもなくがつかりして、そのまま下にお置きになる。)

風情のない末摘花の手紙に源氏は直ちに「見るかひなううちをき給ふ」ありさまであつた。このように、玉鬘と末摘花の文について見比べてみると、玉鬘は筆跡のたどたどしさはあるものの、気品のあることが浮き彫りになる。末摘花は「見るかひない筆者であり、それに比べて玉鬘は、「あてはか」で「御心おちる」筆者であることが源

氏によって明確に定義付けられている。つまり、同じく零落していた末摘花と比べることで、玉鬘の知性の素晴らしさが際立つ仕組みになっているのである。

いわば、玉鬘は末摘花と比べられ、その優位性を認められることで、六条院の一員として浮上できるのであるが、実は、これ以外にも玉鬘と末摘花はその対照性が描かれ、一貫して対照的な人物として設定されているようだ。少々長くなるが、煩をいとわず、次に引用する。

【玉鬘】

① 撫子の細長に、このごろの花の色なる御小桂、あはひけ近ういまめきて、もてなしなども、さは言へど、おなかがび給へりしなごりこそ、たゞありにおほどかなる方にのみは見え給ひけれ、人のありさまをも見知り給ふまゝに、いとさまよふなよびかに、けさうなども心してもてつけたまへれば、いと飽かぬ所なく、はなやかにうつくしげなり。

(胡蝶巻・四一〇頁)

(撫子襲の細長に、この季節の花の色のある御小桂を召して、色合いも親しみやすく、当世風で、振る舞いなども、そうは言っても、田舎じみていらつしやつた名残で、ありのままにおつとりとしているようにもお見えになったが、(六条院に住む)人の様子をお見習

いになるにつれて、大変様子もものやわらかで、化粧なども気をつけて、身だしなみを整えていらつしやるので、ますます非の打ち所がなく、華やかで可愛らしげである。)

② この君は、人の御さまもけ近くいまめきたるに、をのづから思ひ忍びがたきに、おりく人見たてまつりつけば、疑ひ負ひぬべき御もてなしなどはうちまじるわざなれど、ありがたくおほし返しつゝ、さすがなる御仲なりけり。

(蛩巻・四三二頁)

(この姫君〈玉鬘〉は人柄も親しみやすく当世風でいらつしやるので、自然と辛抱しきれなくなつて、その時々々に人がお見かけ申し上げたたら、疑われるに違いないお振る舞いも時々混じるけれど、めつたにないくらい気持ちるを翻しなさつては、それでもやはりうるわしいお二人の仲であつた。)

③ 人からは、宮の御人にていとよかるべし。いまめかしくいとなまめきたるさまして、さすがにかしこく、あやまちすまじくなどして、あはひはめやすからむ。さてまた宮仕へにもいとよく足らひたらんかし。

(藤袴巻・九六頁)

(玉鬘の)人柄は、兵部卿宮の奥方として大変似合いであろう。当世風で、とても優雅で魅力的な様子で、それでいて利口で、道を踏み外すことなどもあるまいから、夫婦仲も安心であろう。ところでもた、宮遣いをするにしても、あの方は不足なく勤め上げるにちがいない。容貌もよく利発で隙がない感じがするが、公のことに不安なところがなく、しつかりしていて頼みがいもあり、主上が常にお求めなさっているお心にそむくようなことはあるまい。)

【末摘花】

A 御文には、いとかうばしき陸奥国紙のすこし年経、厚きが黄ばみたるに、

いでや、給へるは、中くにごそ、

きてみればうらみられけり唐衣かへしやりてん袖をぬらして

御手の筋、ことにあふよりにたり。いといたくほ、笑み給て、とみにもうちをき給はねば、上、何事ならむと見おこせ給へり。御使にかづけたる物を、いとわびしくかたはらいたしとおぼして、御気色あしければ、すべりまかでぬ。いみじく、をのをのはさ、めき笑ひけり。かやうにわりなう古めかしう、かたはらいたき

所のつき給へるさかしらに、もてわづらひぬべうおほす。(玉鬘卷・三二六九〜三二七〇頁)

(お手紙には、香をしつかりたきしめた陸奥国紙のすこし年を経て黄ばんだものに、

「いえもう、頂戴物しましたのもかえって恨めしくて、

着てみると、その裏もわかるが、恨めしく思わざるをえなかつた、この着物を返してしまおう、私の涙で濡らしたままで。」

御筆跡は格別に古風である。(源氏が)ひどく薄笑いをお浮かべなさつて、すぐには下にお置きにならなかつたので、紫の上は何事であろうかと目を向けなかつた。御使者に被けたものを、まったくやりきれず見苦しいとお思いになつて、ご機嫌もお悪いので、御使者はこっそり退出してしまつた。(女房たちはおかしくて)たまらず、めいめいひそひそ噂しあつては笑うのだった。このように(末摘花が)わけもなく古風で、人をはらはらせることがおありになる。その差し出がましさに手に負えそうもないようにお思ひになる。)

B 常陸の宮の御方、あやしうものうるはしう、さるべき

ことのおり過ぐさぬ古体の御心にて、いかでかこの御いそぎをよそのことは聞き過ぐさむ、とおほして、かたのごとなむし出でたまうける。(中略) 御文には、知らせたまふべき数にも侍らねば、つゝましけれど、かゝるおりは思たまへ忍びがたくなむ。これいとあやしけれど、人にもたまはせよ。

とおひらかなり。殿、御覽じつけて、いとあさましう、例の、とおぼすに、御顔赤みぬ。「あやしき古人にこそあれ。かく物づつみしたる人は、引き入り沈み入たるこそよけれ。さすがにはぢがましや」とて、

(行幸卷・七七頁)

(常陸の御方〔末摘花〕は、一風変わってけじめ正しく、しかるべき折にだまつていられぬ昔氣質の御性格で、どうしてこの御支度を他所事と聞き過ごしていられようとお思いになつて、〔玉鬘への祝儀を〕型通りにおやりになつた。(中略) お手紙には、

「お知らせ頂けるような人数にも入りませんので、気がとがめますが、このような折には差し控えてばかりはいられませんので。これは大変粗末なものです、すが、侍女にでもお与え下さい。」

と、おっとりとしたものである。殿〔源氏〕が〔玉鬘の所でそれを〕見つけなさつて、とてもあきれて、ま

たいつものように困つた振る舞いだとお思ひになると、お顔が赤くなられる。「あきれた昔氣質な人だ。このように引つ込み思案な人間は引つ込んでおとなしくしているのがいいのだ。せつかくだが、恥ずかしい思いをすることよ。」と言つて、)

【玉鬘】の①「いまめく」、②「いまめかし」、③「いまめかしく」に明らかたとおり、玉鬘に対しては、いわば「今風」「当世風」とその人となりが評価されている。北村英子氏が、「今めく」は、「若く」「陽気である」「今風である」など、時間的視点から新しい感覚で捉えた意味と、価値評価の視点から明るい感じと捉えた意味とを内包しており、「いまめかし」の語義は「目新しい」「はなやか」「(年)若い」など、誉め言葉や美的語詞、評価語、時間語的観点からの意味をもち、明るく、新しみのある、高尚な趣味性、陽気で不安定、好色的、華麗な感じの意味で用いられると述べておられるとおりである。(注5) それに対し、【末摘花】では、A「あふりにたり」「古めかしう」、B「古体」「古人」と、末摘花はいわば「古風」と同じく源氏によつて評価されている。これについて、三苦浩輔氏が、「容姿教養、いずれの面に於いても自らの古代を頑なに保持し続けて行くのが末摘花の特性だったのである」と述べ

ておられる。^(注)「今風」な玉鬘と、「古風」な末摘花という対照的な人物像として源氏に捉えられていることは明白であろう。つまり、末摘花は玉鬘と対照的な人物として、一貫してそのマイナス性を強調されることで、玉鬘のプラス性を際立たせるようはたらいっていると考えられるのである。

三、蓬生巻での末摘花—花散里との比較—

ここまで見てきたとおり末摘花は、他者と比べられ、そのマイナス性を強調され、低く評価されることで、他者の良さを際立たせる役割をもっている。いわば末摘花は、比較され低められることで、他者が源氏に厚遇されるように働く人物であるようだ。

では、唯一、末摘花が源氏から高く評価される蓬生巻について見てみよう。実は蓬生巻においても、末摘花はやはり比べられている。

かの花散里も、あざやかにいまめかしうなどはなやぎ給はぬところにて、御目移しこよなからぬに、咎多う隠れにけり。
(蓬生巻・一五二頁)

(あの花散里も、際立つて当世風になど派手にはなさ

らないお方なので、末摘花の見た目を花散里に移して見ても大した差はなく、末摘花の欠点もさほど目立つこともなかったのであった。)

末摘花は花散里と比べられているのであるが、源氏は、花散里が「いまめかしうなどはなやぎ給はぬ」ゆえに、末摘花と花散里では「御目移しこよなからぬ」状態で、結果末摘花の「咎」は「多う隠れ」という。前節で見たとおり、「古風」＝「いまめかしくない」というのが、末摘花の特徴であった。「花散里も」とあることから、言外に「末摘花も」と前提されていることが分かり、したがって、ここでは源氏は、花散里をも末摘花と同じく、「いまめかしくない」と評価していることになる。つまり、ここで源氏は、末摘花と花散里を比べて「同等」と認定しているのである。

では、花散里に対する源氏からの評価は、どうだったのか。「いまめかしくない」一面があるのは、今見たとおりであるが、一方、明らかにその性情を好意的に描かれている。

【花散里】

a あだくしき筋など疑はしき御心ばへにはあらず。年

比待ち過ぐしきこえ給へるも、さらにをろかにはおほされざりけり。「空ながめそ」と頼めきこえ給ひしおりの事ものたまひ出でて、「などで、たぐひあらじといみじうものを思しづみけむ。うき身からは、おなじ嘆かしさにこそ」とのたまへるも、おいらかにらうたげなり。

(薄雲卷・一一〇頁)

(花散里は、浮ついた筋など疑いを招くような)気性ではない。長年源氏をお待ち申してお過しになった気持ちも、源氏は決している加減に思いになさらない。花散里は、源氏が「空ながめそ」と、頼み申し上げなさった時の事も、お話し出しになって、「どうして、このような悲しみはまたとあるまいと、嘆き悲しんだのでしょうか。情けない私の身にとつて、ご婦京の今とて同じ嘆かわしきでございますのに。」とおっしゃるのも、穏やかで可愛らしい様子である。)

b
東の院の対の御方も、(中略)たゞ御心さまのおいらかにこめきて、かばかりの宿世なりける身にこそあらめ、と思ひなしつつ、ありがたきまでうしろやすくのどかにものし給へば、おりふしの御心をきてなども、こなたの御ありさまに劣るけぢめこよなからずもてなし給て、毎りきこゆべうはあらねば、おなじごと

人まいり仕うまつりて、別当ども事をこたらず、中く乱れたる所なくめやすき御ありさまなり。

(薄雲卷・二二四頁)

(東の院の対の御方、花散里も、(中略)花散里はただ)気性が穏やかでおっとりして、源氏とはこれだけの因縁になった身なのであろうと、思いこみつつ、めつたにないくらい不安げがなく、心静かにしておられるので、源氏は、その時々のお手当なども、あなたのお方(紫の上)のお扱いと見劣りするような差別をなさらずお世話なさり、誰も花散里を軽んじ申すわけもないから、紫の上と同様に人々もお遣い申し上げて、別当たちも勤めを怠らず、かえって万事が乱れることなく、はた目にも難のない日々でいらつしやる。)

aでは、浮つくことのない穏やかな性格を、bでは、おっとりして安心できる気性を、源氏が好意的に評価している。だからこそ、花散里は、二条院に引き取られ、のちに夕霧や明石の姫君の教育係を任されるように、源氏の信頼を得ていくのであろう。つまり、未摘花と比べられ、その結果、源氏に認められて厚遇されるという流れはこれまでと共通であり、その点で、比較される女君としての、未摘花の役割はここでも一貫していると言えるだろう。しか

し、注目すべきは、ここでは、異なる点も見受けられることだ。それは、末摘花が低く評価されなかったこと、すなわち、花散里と「同等」と源氏に認定されたことであり、これは明らかに他の巻々とは異なっている。他の巻ではマインナス性を強調されることで、相対的に他者の評価を上げるべくはたらいてきた末摘花であったはずだ。しかし、この巻では、末摘花自身も、源氏に厚遇される花散里と「同等」にまで、評価を高めている。なぜ、蓬生巻だけ末摘花は評価を高められねばならないのか。

役割を一貫させている点において、蓬生巻の末摘花像は決して「変貌でない」。しかし、蓬生巻のみその評価は「変貌」する。ここには蓬生巻ならではの論理があるのではないか。節を改め考察する。

四、蓬生巻の意義と末摘花

蓬生巻の最後、「東の院といふところになむ、後は渡したてまつり給ける。」(一五四頁)と記述されているように、末摘花は、二条東院に引き取られる。この点では、末摘花は、前節でふれた花散里と全く「同等」の待遇を得たことになる。このことは見逃してはならないだろう。いわば、末摘花も、源氏の厚遇を受ける側の女君として選ばれ

た、ということになるのであろうが、では、源氏に選ばれる女性とはどのような人であるのか。その基準について注目すべき記述があるのである。

二条院にも、おなじごと待ちきこえける人をあはれなるものにおほして、年ごろの胸あくばかりとおほせば、中将、中務やうの人くには、ほどくにつけつ、なさを見え給に、御暇なくてほかありきもしたまはず。二条院の東なる宮、院の御処分なりしを、二なく改め造らせ給ふ。花散里などやうの心ぐるしき人く住ませむなど、おほしあててつくるはせ給。

(濡標巻・一〇〇頁)

(二条院でも、同じように源氏のご帰京をお待ち申し上げた人たちがいたわしくお思いになって、長年の悲しい思いが晴れるようにしてやりたいとお思いになり、中将や中務といった人々には、それぞれの身分相応にお情けをかけておやりになるので、お暇もなくて外出もなさらない。二条院の東にある御殿で、故院の御遺産であったのを、またとなく立派にご改築なさる。花散里などのようないじらしい人たちを住まわせようなどと、お心づもりなさってご造営なさる。)

二条東院構想について語られる場面である。ここには、源氏に「選ばれる」女性が、「花散里などやうの心ぐるしき人々」とされている。「花散里などやう」ということは、源氏が二条院に住ませたいと思う「心ぐるし」さの基準が花散里レベルであること、すなわち、少なくとも花散里と「同等」のレベルでなければ引き取られないわけである。逆に言うなら、花散里と「同等」以上のレベルであれば、二条院に引き取られる資格があることになる。

つまり、だからこそ末摘花はこの巻において、花散里と「同等」に扱われるのではないか。蓬生巻において末摘花は、須磨流離の源氏を一途に待ち続ける。そのことが源氏の心を揺さぶり、前にふれたとおり、二条院に引き取られるという厚遇へとつながっていく。いわば、二条院への引き取りは、「待つ女」の美德(注7)に感応した源氏による末摘花への報恩なのであり、したがってその実現のための巻でも、蓬生巻はあるのだ。

このような蓬生巻の性格ゆえ、この巻においての末摘花は、高く評価されねばならないのではないか。つまり、蓬生巻は、末摘花と花散里を比べることで、花散里の地位を固めるのみならず、末摘花自身をも源氏に認めさせる巻なのである。いわば、源氏の庇護のもと二条東院で生涯を送る資格を獲得すべく、源氏に「選ばれる」巻なのだ。姥澤

隆司氏が、蓬生巻は、「末摘花の特徴的な醜貌に全く触れられていない」とされた上で、「その性質の美質が称揚されるのである。それは蓬生巻を通して末摘花が常陸宮の姫君という扱いを全面に出されているところからも明らかになる。作者は末摘花を笑ひ者にするつもりがないのだ。」(注8)と述べておられ、そもそも蓬生巻が、末摘花像の「美質が称揚される」ための巻であるとされたが、そのとおりであろう。

長谷川政春氏は、末摘花について、「変貌でない」との立場から、「光源氏の色好みの完成に寄与した末摘花も空蝉も、六条院の『美』の女性群とは別に『醜』の女性として二条の東院に住んでいたのである。否、末摘花が二条の東院の住人であったことこそが光源氏の色好みの完成には必要であったと言うべきであろう。」(注9)と指摘され、「源氏の色好みの完成」のための「醜」女として、すなわち、むしろ源氏その人の度量の大きさを示すための駒として、末摘花を捉えておられる。

しかし、おそらくそれはちがう。末摘花が二条院に引き取られるのは、「醜」女として源氏の「色好み」の幅の広さを示すためでなく、むしろ、二条院の他の女君の水準が、何かしら源氏の厚遇に足る資格を得たものであることを示すためなのではないか。

原岡文字氏は、『古事記』の石長比売伝承を踏まえた上で、「靈力、呪力に溢れる醜女末摘花が、色好みの王としての光源氏を守護する、という見取り図が基本的にこの女君の物語の本質を突くものであることは動くまい。」^(注10)と指摘され、むしろ、末摘花こそが源氏を「守護」すると読み解かれた。卓見と言うべきだろう。末摘花は、源氏の二条院を、そしてその水準を「守護」しているのである。いわば、末摘花は、二条院とその主催者源氏の水準を保証するために、「選ばれる」人物だったのである。

おわりに

末摘花巻、蓬生巻、玉鬘巻、初音巻、行幸巻を通じて、末摘花は、一貫して他の女君と比べられる人物であること、そして、その女君に対する源氏の待遇を高める人物であることが見てとれた。その意味では、「変貌」にもみえる蓬生巻の末摘花像については、「変貌でない」といえる。しかし、蓬生巻のみ他の女君より低く見られることなく、源氏によって花散里と「同等」とされていることは確かであり、それは、二条院の水準の保証のために要請されていることも同時に明らかになった。その意味では、「変貌」との捉え方も間違っていない。

つまり、末摘花の人物造型は、そもそも二者択一で測れるものではないのである。役割を一貫させ、「変貌でない」人物像を持続させながら、二条院の水準保証のためその評価を「変貌」させる。それが末摘花なのであり、そのような末摘花のあり方が顕著に現れた唯一の巻、そして、二条院の水準を保証する意義を持つ巻、それが蓬生巻なのである。

注

1 本稿における本文の引用、頁数はすべて『新日本古典文学大系 源氏物語』（岩波書店）による。底本は、大島本である。（浮舟巻の底本は、東海大学付属図書館明融本である）

2 森一郎氏「源氏物語における人物造型の方法と主題との連関」（『源氏物語の方法』一九六九年 桜楓社）

その他「変貌」説にあたるものとして、玉上琢彌氏「源氏物語評釈 第三巻」（一九六五年 角川書店）、野村精一氏「蓬生」（『別冊国文学源氏物語必携』一九七八年二月 学燈社）などがある。

3 山本利達氏「作者の人間理解—末摘花を中心に—」（『源氏物語攷』一九九五年 塙書房）

その他、「変貌でない」説にあたるものとして、武原弘氏「末摘花論—変貌問題をめぐって—」（『日本文学研究』第一七号）

一九八一年一月 梅光学院大学)、外山敦子氏「末摘花は変貌したのか―老女房との関係性から―」(『愛知淑徳大学国語国文』第二十号 一九九七年三月 愛知淑徳大学国文学会)がある。

4 室伏信助氏「末摘花は光源氏にとって何であったか」(『国文学解釈と教材の研究』二五巻六号 一九八〇年五月 学燈社)
また室伏氏は、「末摘花」(『国文学 解釈と鑑賞』三六巻五号 一九七一年五月 至文堂)でも、末摘花の造型が紫の上を際立たせている、と指摘しておられる。

5 北村英子氏「文脈研究―『源氏物語』における「いまめく」「いまめかし」―」(『源氏物語の展望』第九巻 二〇一一年 三弥井書店)

また、六条院及び玉鬘巻と「いまめかし」との関連性を述べた論に、河添房江氏「六条院王権聖性の維持をめぐって―玉鬘十帖の年中行事と「いまめかし」―」(『国語と国文学』六五巻一〇号 一九八八年一〇月 至文堂)がある。

6 三苫浩輔氏「末摘花の古風固守とその脱皮」(『国学院雑誌』八五巻一二号 一九八四年一二月 国学院大学出版部)

7 青木賜鶴子氏「近江の君・末摘花の物語と和歌」(『源氏物語の歌と人物』二〇〇九年 翰林書房)

なお、青木氏は、末摘花を『伊勢物語』の、いわゆる筒井筒の女や、梓弓の女になぞらえて、「待つ女」と捉えた上で、恋人を待ち続ける理想性と、蓬生巻の「からころも」歌を詠まない末摘花像とを関わらせて論じておられる。

8 姥澤隆司氏「二条東院の女性たち―蓬生・関屋巻―」(『源氏

物語講座 第三巻 光る君の物語』一九九二年 勉誠社)

9 長谷川政春氏(『唐衣』の女君―末摘花)、『人物で読む『源氏物語』第九巻―末摘花』二〇〇五年 勉誠出版)

10 原岡文子氏「末摘花考―靈性・呪性をめぐって―」(『日本文学』五四巻五号 二〇〇五年五月 日本文学協会)